

ICCによる「全年齢型コミュニティの創造:多世代型社会に向けて」 東洋大学国際シンポジウム

「旧山古志村復興支援へ どうかかわるか」

「東洋大学国際シンポジウム」が5月14日午後1時から白山キャンパス上野了ホールにて開催された。これは、1994年から「全年齢型コミュニティの創造」多世代型社会に向けてをテーマに行われている「ICC」による国際学生設計コンペの一環。本学工学部建築学科チームの山古志村復興物語が最優秀賞を受賞したことを受けて、今回は、旧山古志村現長岡市(復興支援へどうかかわるか)をテーマに開催された。

セッションでは、入賞発表・表彰式が行われた。ICC国際学生設計コンペ議長のダイアン・ティリス氏によるコペ総括、国連ハタット親善大使のマリ・クリスティーヌ氏による来賓挨拶に続いて、入賞発表および表彰式が行われた。ここでは本学の建築学科チームのほか、フランス、中国、メキシコなど各国から集まった入賞者が紹介された。そして、ICC国際学生設計コンペ審査委員長のピター・トシャ氏による入賞作品の審査講評が行われた。

セッションでは、建築家、山下明氏による基調講演、最優秀賞を受賞した本学工学部建築学科学生チームによる、山古志村復興物語のプレゼンテーションに引き続き、長岡市復興管理監、長島忠美氏による基調報告が行われ、3ページ参照。最後に、旧山古志村現長岡市(復興支

援へどうかかわるか」というテーマでパネルディスカッションが行われた。パネリストは山根尚之氏(国土交通省大臣官房参事官)、長島忠美氏、山下明氏、内田雄造(工学部教授)、森田明美(社会学部教授)、コーディネーターは古川孝順(ライフデザイン学部長)。

まず、地震発生直後からの国の対応とその後の復興の状況を山根氏が解説。そして、大学としての復興支援の取り組み方を内田教授が、地域住民生活の面からの支援の仕方を森田教授がそれぞれ提案。大学として、研究を通じた支援とともに地域の一員として関わっていくことが重要という意見や、山古志村の自然を利用した「グリーンソリスム」の考え方など、さまざまな角度から復興への道筋が示された。



1 International Council for Caring Communities, Inc.
2 緑豊かな農山漁村地域において、その自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動のこと。余暇活動のニーズや緑への回帰志向のある都会の人々と、交流人口の拡大を通じた地域おこしを期待する農山漁村の人々との「かけ橋」としても期待されている。

パネルディスカッションの概要(要約)



山根 尚之氏 国土交通省大臣官房参事官
地域が自立して助け合う仕組みを作り、それを自治体や国が支援していくことが課題だ。住宅やコミュニティをどう作りあげていくかは、この共助がうまく稼働するかがカギとなる。これはまた新たな災害が起きたとき、自助と共助が機能し、我々がうまく連携できるかにもつながる。



長島 忠美氏 長岡市復興管理監・元山古志村村長
復興のなかで、グリーンソリスムを拡大解釈して、制度として作っていくことが必要。例えば、ある家に居候して田んぼを耕す代わりに、野菜や米を持ち帰る。あなたの家はここです。という気持ちで交流を深めていくことが、日本の中山間地域をよみがえらせる一つの道になるのでは。



山下 明氏 建築家・東洋大学工学部客員教授
私がアメリカで実践しているグリーンソリスムの観点で考えることが出来る。アメリカン・ソリスムが、彼らの大変な財産である自然を掘り起して、タイムシェア・コミュニティとして売買しているが、山古志村も自然という財産を活用していくことが重要。



内田 雄造 東洋大学工学部教授
教員が現地にいき復興計画の相談に応じるほか、学生が後片付けや高齢者の生活支援を行う。学生は学生時代に、自分はこれをやっていた、という体験をしてほしい。結果的に社会貢献となれば幸いだ。住宅の計画支援のほか、高齢者の生活・健康支援・景観計画にも関わりたい。



森田 明美 東洋大学社会学部教授
山古志村復興の根底にあるのは地域住民が支えあうまちづくり。地域の連携を壊さずに復興に向かう姿は暮らしの連続性として注目できる。多様な形で問題を抱える者が共に暮らし、仕事をしながら支えあう地域生活型の援助は都会での子育て実践に通じる。



古川 孝順 東洋大学ライフデザイン学部長
大学もまた、市民の一人として、社会参加という視点を持たなければならぬ。社会現象、自然現象をいかに説明するかという従来の大学の教育を、一歩出て、現実の問題を捉え、どう解決するかを考えること。新しいアプローチが誕生する。現実の問題に関わり合うことが、アカデミックな資質を向上させる糸口になるのでは。

「基調報告」

「みんなで帰ろう」

元山古志村村長としての誓い

長島 忠美氏

「基調報告」

「基調報告」
元山古志村村長としての誓い
長島 忠美氏
去年の10月23日の午後6時頃のことです。自宅で災害に遭いました。突然1メートルほど持ち上がり、次の瞬間、顔の前をテレビが飛んできて、激しい横揺れとともに上の方からあらゆるものが落ちてきました。その後は無我夢中で、気がついたら家内と娘と声を掛け合っていて外に出ていました。そのときになって、やっと地震だと気がつきました。村長の立場から、村民の状況を把握して外部に状況を発信し、これからの対策を練らなければなりません。しかし、道路は大崩落、車は使えませんでした。夜の暗闇のなかで絶えず続く余震の中、歩くこともままなりません。夜が白み始めて目に飛び込んできた光景は、想像をはるかに越えるものでした。私たちが長い歴史をかけて築き上げてきた集落、道路、そして棚田のすべてが破壊されていたのです。最初の地震から約3時間後、やっと県知事と電話が通じ、地震発生第一報を入れられました。下界からの往來が寸断され、14の集落すべての行き来ができなくなっていました。この現実の前で、一番したくなかった決断「村民」今まで大切にしてきたものとすべての財産を捨てて、避難してくれ」ということを決断せざるを得ませんでした。しかし、皆それを理解し、従ってくれました。

当初、村民ははらばらで避難所に入りましたが、集落同士の支え合う気持ちで災害を乗り越えるエネルギーになると思い、集落毎に引越を促していただきました。その後、ある光景に出くわしたんです。布団を両脇に寄せ、真ん中に食事を並べ、集落全員が夕食を囲んでいる光景です。そのとき、自分の考えは間違っていたと思いましたが、仮設住宅の申請も集落毎に設置し、今そこですべての村民が暮らしています。現実には厳しいですが、私が、みんなで帰ろう」と呼びかけたときに、93%の人が帰りたいと言ってくれました。その気持ちを大切にしたい。切羽詰った中で、村民の心の叫びを聞き、向き合う覚悟を決めました。私は今、このことにすべてを懸けているつもりです。つないだ手は絶対に離しません。歩けないときは引張ってもらって、歩けるときは引張って、それが支え合う精神だと思っています。100%の人が帰れる可能性を示すことが、私の責任の果たし方だと思っています。



研究テーマ「持家住宅の計画・建設・供給」
代表者 内田 雄造 工学部教授

東洋大学における山古志村復興支援に関する総合的研究

被災地の方々のためにわたしたちは何ができるか。復興支援にはさまざまな形がある。現地に赴き、ボランティアを行うなどの実践を通じた貢献、義援金を送るなどの基金的な支援。それでは大学としては何ができるのか。東洋大学は社会貢献という一つの使命として、そして9学部41学科という多様な教育研究活動を行う総合大学として、専門的知識を活かした、特別研究チームを立ち上げた。今年度は以下の2プロジェクトにおいて、ハード・ソフト両面から基礎的研究ベースでの山古志村復興支援に取り組んでいく。

山古志の林材 技術を活用した住宅供給システムを

地震により大きな被害を受けた山古志村の住宅は現在市や県により応急仮設住宅が建設され、さらに被災者用公営住宅の建設も予定されているものの、農作業を生業とする土地柄、大多数の住民の希望は持家住宅居住です。しかし地震保険に加入している住宅はごく少数である上、住宅の建設に対しては国からの助成はないのが現実です。そのため山古志村は村有林を伐採し、その材を住民に無償で提供することになりました。研究ではこの材を活用し、地域の技術でログハウスか種雪対応型の住宅供給システム工法に対する支援をすすめます。



研究テーマ「被災住宅の生活実態調査と生活要求」
代表者 田中 淳 社会学部教授

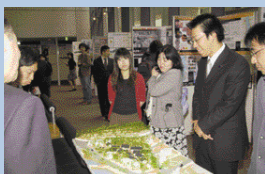
復興課題の抽出を生活者の視点から

復興課題の抽出を生活者の視点から
災害は人命だけでなく、地域の生活や産業基盤をも奪います。地域の復興には道路や建物の再建だけでなく、地域に住む人々の声を反映させた生活の再建を行わなければなりません。しかし復興過程では、住民の声は個々の問題として見過ごされ、行政施策に反映されにくい。また、被災1ヶ月後、1年後、と時が経過するにつれて被災者自身は変容し、外からは見えにくいものとなります。研究では山古志村住民に対する継続的な調査を実施し、生活課題を掘りながら復興の論点を抽出、生活者の視点に寄り添った産業基盤、生活基盤再建のための提案を行います。

国際学生設計コンペで最優秀賞

「山古志村復興物語」

国際学生設計コンペで最優秀賞
「山古志村復興物語」
シンポジウム当日には授賞式が行われ、このコンペの主催であるICC議長ダイアン・ティリス氏から賞状と賞金が授与された。最優秀賞という日本人初の快挙を成し遂げた建築学科4年生の5名(鹿倉三裕さん、黒澤麻美さん、花刈勇介さん、亀塚清加さん、尾崎史さん)受賞時は3年は受賞作品となつた山古志村復興物語を改めてプレゼンテーション会場からの大きな拍手に包まれた。



井上円了ホールロビーには設計コンペの最優秀賞ならびに入選26作品のパネルを展示。写真は作品模型を前に来賓者に説明する受賞者代表の鹿倉さん(作品の詳細は東洋大学報197号17に掲載しています)

「共生学」の構築と発信を目指してー東洋大学の新しい使命

「共生学」の構築と発信を目指してー東洋大学の新しい使命
現代の日本はグローバルスタンダードを求める国際化の波に洗われています。しかし、今日のグローバルスタンダードは、必ずしも世界の普遍的な原理として確立されているとは言えず、諸地域で種々の紛争・軋轢を生み出している状況にあります。このような中で東洋大学では、現代社会が抱える各種の対立的構造を超越するために、東洋的な知を基盤として、自立と連帯、寛容と相互扶助を基本とする、共生の思想を具現化する「共生学」の構築と成果の発信を企画する全学協働のプロジェクトを進めています。今回の国際シンポジウムは、全年齢型コミュニティの創造、多世代型社会に向けて「をテーマにした国際学生設計コンペに伴う開催です。コンペで最優秀賞を受賞した本学の建築学科チームは山古志村という日本の古里の原風景をモデルに地震からの復興と、高齢者とそこに訪れた人をも含むコミュニティの再構築を提案したことが高い評価を受けました。この作品も前述の「共生学」の一面面であるといえます。清新な感性をもつ学生のみならず、共生学」の構築へ向けて積極的に参画してくれることを期待します。

学長 松尾友矩